

特集

庵野秀明

ロングインタビュー

「宇宙戦艦ヤマト」50周年

「宇宙戦艦ヤマト」は1974年に読売テレビをキー局に、日本テレビ系列で放送されたSFアニメだ。再放送などを重ねるうちに社会現象とも言える大ブームを起こしたのはいまさら言うまでもない。それから半世紀後、「ヤマト」50周年を記念して、庵野秀明氏が代表を務めるカラーによる新作「ヤマト」の制作が発表された。特集では庵野氏の「ヤマト」との出会いから熱い想い、そして「ヤマト」が現在のアニメーションにもたらした功績などを語ってもらった。



庵野秀明 — あんの・ひであき

監督、プロデューサー、株式会社カラー代表取締役社長、特定非営利活動法人アニメ特撮アーカイブ機構（ATAC）理事長。1960年山口県宇部市生まれ。学生時代から自主映画制作を手掛け、82年『超時空要塞マクロス』で初めて商業アニメ作品にアニメーターとして参加。88年「トップをねらえ」で初めて商業アニメ作品の監督を務める。98年「ラブ&ポップ」で初めて商業実写映画の監督を務める。06年株式会社カラーを設立。17年特定非営利活動法人アニメ特撮アーカイブ機構を設立。同年芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。22年紫綬褒章を受章。アニメの監督／総監督作品に「ふしぎの海のナディア」「エヴァンゲリオン」シリーズなど、実写の監督／総監督作品に「シン・ゴジラ」「シン・仮面ライダー」などがある。13年「風立ちぬ」では主人公の声を務める。

「ヤマト」がなかったら 今の日本のアニメーションはないと思うんです。

「ヤマト」は前例なしに突然出現した

編集部（以下、——） 「宇宙戦艦ヤマト」が2024年10月6日に放送50周年を迎え、様々な記念企画が催されているということで、企画者でもある庵野（秀明）さんの「ヤマト」に対する個人的な想いをたっぷり語っていただきたいと思っています。インタビューは「ヤマト」研究の第一人者、アニメ特撮研究家の氷川（竜介）さんをお願いしています。氷川竜介（以下、氷川） もう何度も語られていると思いますが、改めて原体験っぽいところからお願ひできそうですか。庵野秀明（以下、庵野） 「ヤマト」との最初の出会いはずレビよりも『サンデー』を古本屋で見たのが先になります。氷川 『少年サンデー』（小学館）の記事ですね。

庵野 そうです。塾の帰りに偶然立ち寄った古本屋に1号前の『サンデー』があつて、巻頭に2色（印刷）の特集がありました。それがヤマトの第三艦橋や艦内工場の絵でした。

氷川 設定をそのまま載せたんですね。

庵野 ページを開いて見た瞬間、すぐに松本零士先生の絵だと思いました（設定は加藤直之氏が執筆）。「松本零士の絵がテレビまんがになる」というのがまず衝撃でした。その後、常連の本屋に行ったら『冒険王』（秋田書店）があつて、それに松本先生の描いた漫画の「宇宙戦艦ヤマト」第1回が載っていたんです。これは立ち読みじゃいかんとなつて、なかなかの小遣いで11月号を買つて、その後毎月買うようになりました。アニメを観始めたのは2話からですね。親がもつたないからと捨てないでおいいたモノクロ

テレビで観てました。もし、それが捨てられていたらウチでは「（アルプスの少女）ハイジ」しか観られなかったもので、リアルタイムで「ヤマト」を観ることができず、おそらく今の自分はなかったですね。オープニングを観たその瞬間から今で言う沼にはまったという感じです。

氷川 『冒険王』はテレビの第1話を丸々コミカライズしていましたね。

庵野 ええ。なので、テレビではその続きから観られてタ イミング的に話が繋がつていてよかったです。テレビの1話を観られたのは高校生の頃の再放送でした。最初に僕が観た2話は、理由はわからないんですが、（戦艦大和登場

シーンに流れる音楽が）軍艦マーチだった記憶があります。地方だけ軍艦マーチだったんですね。

氷川 当時ネット局は右傾化批判を避けるため、別の曲に差し替えたんですが、おそらくフィルムネットのローカル局は差し替え前だったのでしょう。

庵野 「ヤマト」のような「テレビまんがなのに大人向け」と感じられる作品は今まで観たことがありませんでした。中学生の自分が観ても恥ずかしくないというのは大きかったです。それまでもタツノコ（プロダクション）が「（科学忍者隊）ガッチャマン」や「（新造人間）キャシャーン」などでかなりハードなSF描写をやっていました、が、「キャシャーン」でもときどき子供がゲストの主役になるような回があつて、やっぱり子供が出てくるんだと思いましたし「ガッチャマン」も甚平は子供ですからね。リアルな忍者隊みたいな話をして

もどうしても子供隊員が1人入ってしまう。「（仮面の忍者）赤影」も青影がそうだし「ウルトラマン」もホシノ君、いましたから。

—— せっかく話がリアルに進行していくのに、子供がマヌケな行動をして怪人に捕まって人質になったりするとイライラしますね。

庵野 どれも子供番組ということで視聴者の分身

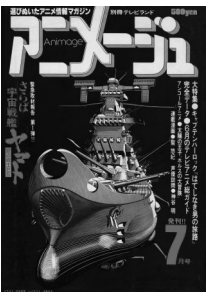


宇宙戦艦ヤマト

1974年10月6日-1975年3月30日
企画、原案 西崎義展、山本暎一 / 監督、設定・デザイン 松本零士 / 脚本 藤川佳介、田村丸、山本暎一 / 音楽 宮川泰 / 演出 石黒昇 / キャラクターデザイン 岡迫弘弘、芦田豊雄 / デザイン協力 スタジオぬえ / プロデューサー 西崎義展 / 全26話

西暦2199年、人類は滅亡の危機にあった。地球侵略を企てる謎の星ガミラスの攻撃により地表は放射能に汚染された。そんな中、イスカンダル星より放射能除去装置・コスモクリーナーDの情報がもたらされる。人類はメッセージとともに送られてきた波動エンジンの設計図を基に、第2次世界大戦の戦艦「大和」を宇宙戦艦として再建造、コスモクリーナーDを受け取るためイスカンダルへ向かう。人類滅亡まであと1年。ヤマトは往復29万6千光年の旅に出た。

©東北新社 / 著作総監修 西崎彰司



『アニメージュ』創刊号表紙。1978年5月26日に徳間書店から創刊された月刊アニメ雑誌。「ヤマト」ブームをいち早くキャッチしたテレビランド増刊『ロマンアルバム 宇宙戦艦ヤマト』が40万部と大ヒットしたことで創刊の運びとなった。

となるような子供を1人は用意してしまうんでしょね。でも「ヤマト」では子供は（島大介の弟）次郎君と徳川機関長の孫のアイ子だけで、基本青年と大人しか出てこなくて、同級生に薦めても恥ずかしい、というリアルな感じがよかったです。ヤマトの斬新でかっこいいデザインや壮大な世界観にSF的なセンスオブワンダーも感じて取り込まれました。

あとヤマトのメカの細部に至る描き込みやマニアックな各種描写なども今まで観たことがなかったですね。今までに観たことがないというのは「ウルトラマン」のときも同じような衝撃だったので、エポックなんだろうと思います。「ヤマト」もそれまでに何もなかったところに突然出現した感じがします。「（機動戦士）ガンダム」は「鉄人28号」というエポックから始まった巨大ロボットものを搭乗型に変えた「マシンガンZ」という次のエポックからの流れの中で、「超電磁ロボ コン・バトラーV」や「無敵超人ザンボット3」等のリアル志向への潮流の先に出現したエポックだと思うんですよ。「ゲッターロボ」も狭い世界では十分エポックなんですけど、世間的にエポックなのは「ガンダム」ですよ。

氷川 どれも前例を更新してるけれど「ヤマト」の場合、確かにゼロからですね。

「ガンダム」も「エヴァ」もないですから。あれでやっぱり日本のアニメーション、アニメーションという言葉も含めて「ヤマト」以前、「ヤマト」以後で区切っても僕は全然問題ないと思います。アニメ雑誌が生まれたのも「ヤマト」からですね。「ヤマト」がなかったら「アニメージュ」（徳間書店）もなかったし。

——『アニメージュ』創刊号の表紙は「（さらば宇宙戦艦）ヤマト」でした。

氷川 そうするとジブリもないという。
庵野 『アニメージュ』がなければジブリもないですね。もし『アニメージュ』が創刊されなかったら、鈴木（敏夫）さんは『テレビランド』（徳間書店）か『アサ芸』（『アサヒ芸能』、徳間書店）の編集者のままですしね。ただ「ゴジラ」や「ウルトラマン」などの特撮作品はあったので『ファンコレ（ファンタスティックコレクション）』（朝日ソノラマ）は残っていたかも。

庵野 「ヤマト」は前例なしでゼロから突然生まれたイメージがありますね。戦記物は「決断」や、「0戦はやと」等がその前にもありましたけど、宇宙を舞台にした戦記物という概念の作品はありませんでした。「ヤマト」はあまりにも唐突に生まれたので原則的にワンオフなんですよ。「ヤマト」ってエレメントというか基礎で構成されているので要素が分解できない。なので再構成を試みても元と同じ「ヤマト」にしかならなくて、「ガンダム」にはできた各種の作品世界の拡がりが「ヤマト」にはなく、連続した世界の話の続きものとして繋げていくことしかできなかったんだと思います。西崎（義展）プロデューサーの確固としたヤマトの世界観と船そのもののへの熱い想いもありましたし。そこも含めて「ヤマト」は特殊なアニメだと思うんですね。「ヤマト」が今に続くアニメブームの始祖で、その後のアニメーション業界をも大きく変化させ、ビジネス的な主幹の一本となったのは間違いなく偉大な功績だと思うので、現実的な話として「宇宙戦艦ヤマト」があの段階で登場しなかったら、今のアニメーションの歴史はまったく変わっていた、全然違う世界線だったと思います。

氷川 子供っぽいまずつと続いていたかも。

庵野 ええ。ティーン向けのアニメとかはしばらく作られなかったと思います。もちろん「ヤマト」がなかったら「ガ

氷川 特撮に振れていたかもしれない。

庵野 ただ「ヤマト」が大ブームになったので特撮がさらに下火になったと思います。「マシンガンZ」でヒーローとロボットのお株を取られた後に、いわゆる万能戦艦みたいなイメージというのは特撮の専門だったのに「ヤマト」がそれも描いてしまいましたから。それまではウルトラホークとかITCメカとかマイティジャック号や東宝特撮メカなどメカと言えばアニメじゃなく特撮だったんですが、「ヤマト」のマニアックなメカ描写が書き替えてしまった感があります。「ヤマト」は段取りに加えてメカの存在感として当時あれだけの描き込みがあるというのもすごかったですね。自分で模写してみても、えっ、こんなに線いっぱい描かなきゃいけないのかと驚きました。模写でも完成するまで時間かかるんです。そこも含めて全然違うんだと思います。

氷川 そうですよ。

庵野 特撮の専門だったメカを、メカと言えばアニメーションというふう置き換えたのが「ヤマト」のすごい功績の一つだと思います。言ってしまうえば、アニメを万能にしたいんです。メカもキャラもティーン向け、大人向けに全部描き換えてしまいました。それから「ヤマト」を作ったのは虫プロ系のスタジオですけど、「ヤマト」を作るため

にスタジオも作っているというのも新しいですね。
——西崎義展のオフィス・アカデミーですね。

氷川 制作スタジオも固定ではなく、「ヤマト」用に立ち上げて、終わったら解散したので、後に増えるオリジナル作品用のプロジェクト制だったんですね。

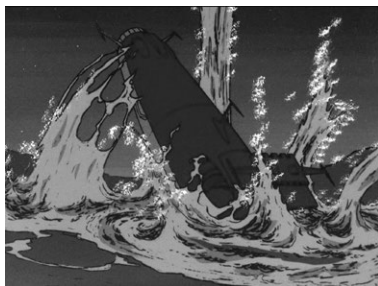
庵野 プロジェクトになっていたのもすごくよかったと思いますね。制作スタジオのしがらみがないところで「ヤマト」ができています。同じ時期に「ハイジ」があったというのも日本のアニメのすごいところだと思いますけど。
——日曜19時半。

氷川 そうなんです。円谷プロの「SFドラマ 猿の軍団」含めて表裏関係だった。

庵野 「ハイジ」も当時はそこまで気がつかなかったですけど、アート性もすごいし、高畑（勲）さんと宮さん（宮崎駿）が組んでテレビシリーズができるとか、改めて観ると間違いなく日本のアニメーションを変えている作品ではあると思うんです。毎週放送しないといけないテレビシリーズで毎回あのクオリティを維持する作品作りがシステム含めてできているというのは。

氷川 そうですね。当時は毎回、バラバラの作風で当たり前だったのに、ずっと均一のまま進んでいく。

庵野 あれだけのクオリティが1年間毎週維持され続け



第7話より。冥王星の基地司令シュルツと副官のガンツはヤマトを射程距離まで誘い込み反射衛星砲で撃沈しようと企てる。ラストシーンで「またも海の藻屑となる運命を繰り返すのか」のナレーションとともに沈んでいくヤマト。

観た強烈な覚えがあつて、あの渦巻きのリピートは白黒でした。8話は反射衛星砲が爆発するところとか、津波のところなどカラーのイメージがあります。あと（冥王星の）原住生物が青色っぽいのは記憶にあるので、8話からカラーで観られるようになったのかもしれない。

氷川 記憶に強烈に焼き付くぐらい一生懸命観ていたということですね。

庵野 ええ、焼き付いていましたね。

「ヤマト」のリアリティに痺れた

て、後の「（母をたずねて）三千里」も同様というかさらに高いクオリティだというのは、ちよつとアニメに詳しくればだれもが気がつくことでした。もし僕にチャネル権があつたら「ハイジ」でなくキャラの絵柄が「ルパン（三世）」みたいだった「侍ジャイアンツ」を観ていたと思います。

氷川 「ヤマト」の前番組の（笑）。

庵野 ええ。それでもし「侍ジャイアンツ」の最終回を観ていたなら、間違いなく「ヤマト」の予告も観るから、それを観て驚いて「ヤマト」は1話から観ていたはずなんです。だけどチャネル権がなかったので1話のときは家族と一緒に裏の「ハイジ」を観ていたんですね。でも他の家族が「ハイジ」をカラーテレビで観ているときに、僕だけ使ってたなかった18インチのモノクロテレビで2話から「ヤマト」を観るようになりました。そしたら親父もそのうちに「ハイジ」より「ヤマト」のほうを気に入ってきたみたいで、そのうちに親父は2台目の14インチのカラーテレビを買ってくれたんです。

氷川 素晴らしい。本放送中？

庵野 はい、本放送中に。なので僕は9話あたりからカラーで観るようになったはずですが。ただ7話までは間違いなく白黒なんです。最後の沈没していくところは白黒で

けど、さつきメカという話もありましたが、どのへんの記憶が一番鮮明ですか。

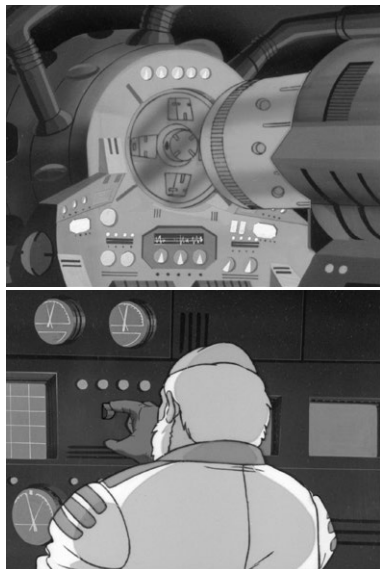
庵野 オープニングの泉口（薫）さんが描いた艦長室からカメラが引いて艦体全景になり傾斜して前進するカットで、まず心を焼かれました。そして2話の友永（和秀）さんが描いていたヤマトの登場シーン。音楽のD-1Bがスタートして、そのまま回頭を始めるところですね。これが動くというのがまず衝撃だった上に、この「主砲を発射する段取りがずっと描かれている」というのもそれまで映像で観たことなかったですから。

氷川 「ヤマト」は狙いを定めるための点呼が分厚い。

庵野 ちゃんと動力伝達をして、「艦首波動砲のみ動力不



第2話から原画で参加している友永和秀氏の描いたヤマト。友永氏は「さらば宇宙戦艦ヤマト」の彗星都市帝国との戦闘シーン、劇場版「銀河鉄道999」のアルカディア号の戦闘シーン、「ルパン三世 カリオストロの城」の冒頭カーチェイスなど数多くの印象に残るシーンを描いた名アニメーター。

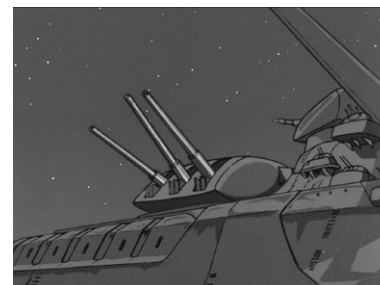


【上】第5話より。初めての波動砲の使用シーン。木星の浮遊大陸を、遊星爆弾のあるガミラスの基地ごと吹き飛ばすが、想像を超えた破壊力に発射後は爽快感とはほど遠い。【下】スイッチ類の多くはレバー操作で電気回路の接点を切り替えるトグルスイッチ。メーターなどの計器類はアナログが多かった。

よね。超光速宇宙船のエンジンなのにクラッチあるんだ、とか、細かいディテールにもすごく痺れました。もちろん「ヤマト」は人間ドラマもいいですね。10話でものすごく痺れました。3話の古代君と沖田艦長のくだりもすごくよかったですけど、人間ドラマは10話に大きく集約されましたね。戦闘シーンがないというのも意外でよかったです。やっぱり徳川機関長と佐渡先生に泣かされました。まあ、2人とも同じ人ですけど。

氷川 声優さん（永井一郎）が（笑）。

庵野 ええ。同じ人ですがあの芝居、とくに徳川機関長はよかったですよ。「まだまだ話したい」の「まだ」っていう言い方がすごく真に迫っていて。それと佐渡先生の「宇



第2話より。主砲がそれぞれバラバラに旋回した上で位置を定めて発射するシーン。1砲塔あたり3門の砲身が個々に独立して動きながら砲塔が旋回し、目標に向けて3門が揃う。デジタルの数字が並ぶ計器パネルとカットごとに切り替わる。

足」とか報告して、あつ、撃てないものもあるんだ、という描写とか、あそこまでのリアリティは脚本にはなかったもので、たぶん松本先生が絵コンテのときに描き足したんだと思います。メカに対しての松本先生のリアリズムに痺れた感じですね。あと主砲がバラバラに砲身を動かしながら回転していく正確さとか、（計器上の）数字が揃っていく中で、最初は第3砲塔だけ数字が揃ってないとかの細かいところまで含めて。

氷川 「訓練と同じだ。あわてると、沖田艦長が言うところですね。」

庵野 はい。あと狙いを定めるときに汗を拭くといった細かい描写、大人の仕事という感じがしました。古代君が白

い手袋をしています。白の手袋って仕事している運転手のイメージがあつて、そういう細かなところも含めて2話には痺れたんですよ。3話も敵ミサイル接近の中で波動エンジン始動の段取りとかサスペンスも含めていい。4話のワープもよかったですけど、やっぱり次は（5話の）波動砲ですね。波動砲は発射準備開始から2分40秒くらい、ウルトラマンだとカラータイマーが鳴りだすくらいまでの時間を、命中までの描写として使っています。二十数分のアニメなのに、その10分の1を波動砲発射の段取りに費やしているというのが痺れましたね。

氷川 波動砲に動力を回すために艦内の灯火を消すとか。

庵野 トグルスイッチみたいなので電源のオンオフとか、圧力上昇もコレ（バルブを回す仕草）ですから。

氷川 ボイラー室みたたく（笑）。

庵野 未来なのに物理スイッチなのが地続き感があつてよかったです。5話は波動エンジンの始動までのエンジンルーム内の描写も痺れました。

氷川 フライホイールが回ってる機関室の描写ですか。

庵野 ええ、補助エンジンのフライホイールが回ってからメインエンジンに接続して次が回り始めるとかの段取りもすごくよかったですよね。点火器挿入や圧着板ロック解除という言葉に痺れていました。圧着板ってクラッチです

宙は大きいのだ」ですが、声が同じ人というのに当時は気がつかなかったんです。ある日突然、あつ、この2人同じじゃないかと思いました。

氷川 同じ場所に出てこないからという理由で兼ね役にしたと聞きましたが、最後のほうで一緒に出ちゃいましたね。

庵野 17話や25話で一緒にいますからね（笑）。別録りにしているのかな。

氷川 そうなんです。25話のアフレコ見学で、「馬鹿な！」だけオンリーで録ってるの目撃しました。

庵野 あれはボヤッキー（「タイムボカン」シリーズの「ヤッターマン」と伴宙太（巨人の星）が同じ人っていうくらいインパクトが。

氷川 声優さんの印象がかなり残っているのはカセットテープに録ったからですか？

庵野 ええ、カセットの録音は5話から間に合いました。

氷川 ちゃんとケーブルを使つて？

庵野 いいえ、テレビ音声が録れるアンテナ付きのラジカセでした。

氷川 それはすごい。ハイテクじゃないですか。

庵野 当時ソニーの最新のやつで。最初はイヤホンで録ろうとしたんですけど、そうするとテレビの音

が聞こえなくなっちゃうのでこれではダメだと。それで、親に英語の勉強するって言ってラジカセを買ってもらった。

氷川 当時定番の言い訳で、自分も同じでした(笑)。

庵野 聴いていたのは英語じゃなくて「ヤマト」の音というかセリフですけど、結局いまの仕事に英語よりも役に立ったなと感じます。「ヤマト」の音でいろいろ覚えただけ。専門用語を使った段取りも、ストレスなく書けるようにはなりましたし。

氷川 あと音楽や効果の入るタイミングとか。

庵野 そういうのもすごく身に付いていますね。田代(敦巳／音響監督)さんの仕事はすごく音の感覚にしみ込んでいるんじゃないかなと思います。

氷川 アフレコやダビングに画が間に合わないくらい時間のないところで、すごい仕事をしていますよね。

庵野 劇伴の使い方や効果音の使い方など、そういうのを意識するぐらいまで繰り返し聴いていたのは「ヤマト」が最初です。

氷川 遊星爆弾のところとか、派手なシーンだけでも全然違う女性スキヤットを付けるというのは特殊でした。

庵野 ああいう通常と逆な音楽の使い方とかも含め、傑作は得てして音楽や効果音もいいですからね。

いて、これじゃないって。

氷川 そうですね。ドラマ中心でBGMがオマケ的についていた。

庵野 ドラマ編よりも音楽を聴きたいのに、と当時は残念がってました。でも同じように思っていた人が数多くいたと思うんで、劇伴が商売になるって当たりを付けたのは、たぶん「ヤマト」が最初だと思うんですね。

氷川 そうですね。インストだけで売れるということ自体、まだ信じられていない時代だったようです。アニメのアルバムと言えば「歌」でした。

庵野 挿入歌やイメージソングではない劇伴音楽そのものを欲する世代が生まれてきたということですね。僕の高校生まで聞いていた音楽ってほとんど観ていたテレビや映画のテーマソングや劇伴、家族がテレビやラジオで聴いていた歌謡曲や演歌なんです。あとは中学の友達が貸してくれたフォークソング。どこかで読んでいたもので決まるらしいんです。だから自分の好きな音楽は劇伴、歌謡曲、フォークソング、それとアニメ・特撮ソングがメインですね。高校以降は、80年代から90年代の邦楽は好きであれこれ聴いてました。バンドメンバーの歳が近いのでこの20年くらいクレイジーケンバンドを聴いたりもしていますが、メインはず

氷川 宮川(泰)さんの音楽はどうですか。

庵野 すごくよかったですよね。でもLPが出たときに貯めていたお金ですぐ買ったんですけど、サントラだと勝手に信じこんでいてまさかドラマ編とは思ってもいなかったんです。家に帰ってすぐにレコード針を落としたときに「音楽だけと思ってたら違ってた！」とショックだった記憶があります。最初のオリジナル音源のサントラ盤が出るまで随分と時間がかかりましたけど、出たときは心底嬉しかったです。後で聞いた話だと西崎さんがモノラルは聴かせたくない、音楽はステレオじゃないと、というのでずっと渋っていたらしいんですね。

氷川 どうせだったらいい音で聴かせたいというサービス精神だったみたいで。

庵野 交響組曲も良いのですが、個人的に演奏し直したステレオの音じゃなくて、テレビと同じ音の方を聴きたい、というのが強くありましたね。

氷川 大幅にアレンジされちゃっていますからね。

庵野 でもその後キングレコードがオリジナル・サウンドトラックのシリーズを始めてくれてよかったです。

氷川 「機動戦士ガンダム」で？

庵野 「ガンダム」もですし、やっぱりその前の「ウルトラ怪獣大百科」ですよ。あれも最初は番組の音も入って

つとアニメ・特撮ソングや劇伴曲、昔の歌謡曲や演歌等のままでした。65歳を過ぎてもこれらは離れないですね。その中でも劇伴は聴いていると音楽の奥にあるその時の映像とそれを観た時の感情の記憶を連想させてくれるので特に好きなんだと思います。

基本は夢でできてる

氷川 「ヤマト」には第二次世界大戦の要素が投影されていますよね。そのへんのミリタリー要素はどうでしたか。

庵野 二次大戦、太平洋戦争の情報は僕らが子供の頃は少年誌の巻頭カラーで大和の特集とか零戦の特集とかたくさんやってました。戦争映画もテレビでよく放映してましたし。

氷川 そうです。僕らにとって、戦艦大和と零戦は一種の超兵器でした。

庵野 子供の頃は周りの大人がみんな戦争経験者で、実際に戦場に行った人もいました。ウチの親は戦争に出る前に終戦だったので戦場は知らないんですけど、当時の小中の先生とか近所の高齢の人は戦争経験者だらけでした。傷痍軍人の方もいましたし。僕が生まれたときって戦争が終わってまだ15年ですからね。

氷川 そうなんですよ。

庵野 ええ。まだ世間が戦前や戦中を引きずっていたので、そういう戦争の残り香みたいなのがあった分、漢字のほうの「大和」のイメージというのはすごく残っていますよね。――「ウルトラマン」でも軍艦怪獣ヤマトンの企画ありましたし、「ウルトラセブン」でもアイアンロックス登場していますし。

庵野 今は難しいテーマになっていると思うんですけど、当時は戦争があつたのが当たり前でした。戦艦大和の生まれ変わった姿が宇宙戦艦ヤマト、というのは、コミックスに沖田のセリフとして書いてありますから。

氷川 よく大人が「宇宙戦艦ヤマト」と言わずに「戦艦大和」と言うのが嫌だったりました。

庵野 いや、こっちは「宇宙」なんですって言っても（笑）、親たちから見れば戦艦大和なんです。大和と零戦だけは特別という人が、子供も含めて当時はいいいたと思います。

氷川 ストーリー的には後半になって、戦いもほとんどエスカレートしますが、そのへんはどうでした。

庵野 ずつとのめり込んで観ていました。話もシンプルです。から。「ヤマト」って艦船の正しい使い方の一つなんです。船ってどこかに行つて用事を済ませて帰ってくる、

これ、さつきスターシャがいた星で、こっちはガミラスのほうつていうのが絵でわかりますね。そういう壮大なネタバレをすぐにするってなかなか大胆だなと。構成を考えると、最後の目的地とラスボスと同じ場所にあるのはい

と思うんです。それが段取りとしてシンプルになるし、頂き物をプレゼントされる場所と、ラスボスの場所が一緒というのはクライマックスとして描きやすい。にしても、最初にネタバレさせるとは（笑）。「ラ・セーヌの星」のアルバンイトル並の強烈なネタバレです。ね。（「宇宙戦艦ヤマト」2199）では大マゼラン雲にたどり着いたときに乗組員と同じタイミングで「エーツ」となるようにしてましたけど、残念ながら視聴していたほとんどの人は知っているんで、まったく前情報なしに「2199」から観ている人以外には効果が薄かったみたいです。ね。

戦闘しながら単艦で遠方への航海というのもリアルに考えるとかなり困難なので、それはもうロマンシかない。「ヤマト」って、基本は夢でできています。ね。全体的には壮大な夢物語、寓話でしかない。だけど大小様々なリアリティでそれがほんとにあるかもしれないという錯覚を瞬間、瞬間感じさせてくれるのが特撮に近い感覚があつて、それもいいんです。特撮ってミニチュアとわかつて観ていても、ごくまれに「えっ、ここ実写？」って思わせる瞬間がある



ささきさおの歌う「真赤なスカーフ」の流れるエンディング。第1話からイスカンダルとガミラス星が双子惑星という壮大なネタバレ。

もしくはどこかに何かを輸送するというのが本来の目的で、戦艦は必要なくところに大砲を持つていくというのが目的の船です。「ヤマト」は大砲を持つていつて戦闘をするんじやなくて、大砲で自分の身を守りながら、地球を助けるための装置を遠路はるばる光の速度を超えて取りに行つて、期限内に帰つてこなきゃいけないという、ものすごくわかりやすいメインストーリーがよかったです。ね。

不思議なのは、イスカンダルとガミラスが奇妙な双子惑星という設定、2話あたりでもう言つてるじゃないですか。こんな壮大なネタバレを最初に言つてしまふ。

氷川 はい、エンディングにも毎回出ています（笑）。

庵野 ですよ。1話の段階でエンディングに出ている。

のがいいところなんで、「ヤマト」もそれに近い感覚かなと思うんです。

氷川 目的地に着くまで、ほぼ閉鎖空間というのも船のいいところだったのかなと。普段から食事したり、喧嘩したり、将棋したり、いろいろ身近なことを描いてました。

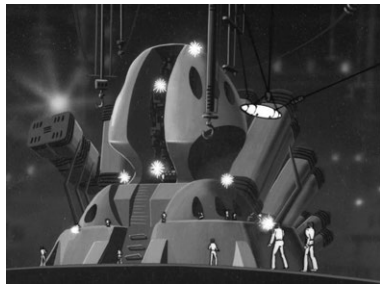
庵野 生活描写も艦内でできます。ね。それも艦内の設定がしつかりできているというのが大きかった。ただ艦内のあの広さはリアルではないんですけど。

氷川 そこはウソですよ（笑）。

庵野 パーティ会場の側方展望室は巨大すぎでした。艦内工場や格納庫もヤマトの艦体よりも大きいです。ね。組み上がったコスモクリーナーDも大きすぎると（笑）。あと、受け取りに行くから、それ用の場所を空けているはずですよ。でも大きさもわからないモノをどうするつもりだったんだろう（笑）。

氷川 そういうアバウトなところだけ、まだ「テレビまんがの時代」なのでしょう。「ガンダム」もそうじゃないですか。「半分テレビまんが」で。

庵野 最初の「ガンダム」は、それまでの巨大ロボットプロレスの各種要素が多分に入っているのがいいですよ。ね。あの絶妙なバランスが。なんか全部ミリタリーに振つて、リアル系ロボットものとしてガチガチになったのは、「Z」



第25話では組み立て前のパーツで、26話で登場した放射能除去装置（コスモクリーナーD）。イスカンダル星でスターシャから受け取った装置で、ヤマト艦内で組み立てられた。使い方によっては、空気を猛毒性の酸欠空気に変えてしまうという問題点もあり、一時は森雪の命を奪いかける。

（続編の「機動戦士Zガンダム」）からだと思うんですけど、リアル描写に囚われすぎて「ガンダム」の魅力が個人的には半減した感じがします。なので、香港のサイコ・ガンダムはよかったです。

氷川 「ヤマト」もところどころそういうところがありました。

庵野 ええ、どこかしら適当なところがいい感じに残ってますよね。最後の「完結編」まで残ってます。ただ「ヤマトⅢ」のあたりから「ガンダム」が始まっちゃったんで。

氷川 「ヤマト」が主流でなくなったのは、そのせいですか。

庵野 ええ。それまでは「ヤマト」がアニメとしてはかなりリアルな方向に行ってたんですけど、リアルさのパロメーターで見ると、「ガンダム」のほうが上に感じたんですよね。あれで「ヤマト」熱がファンの間で冷めていったのはあると思うんです。本来「ヤマト」を好きだった人が次々と「ガンダム」に流れた感じなんです。自分もそっちに行った感じがありますし。なにせ「ヤマト」と「マジンガーZ」を足したのが最初の「ガンダム」ですから。SF的な世界観も新しいし、両方の長所やヒット要素があるので面白いんです。とは言え「ガンダム」に惹かれながらも「ヤマトⅢ」、「完結編」、「復活篇」とリアルタイムに観てます。やっぱり好きなので観ちゃうんですね、「ヤマト」は。

に終わるんだ」と（笑）。

氷川 確かにそうなんです。当時の10月番（組）は「（仮面ライダー）アマゾン」も「破裏拳ポリマー」も2クールなので。

庵野 74年って、2クールもののばっかりでしたね。あとリアルタイムで「ヤマト」を観ていて驚いたのは、22話のオープニングがなかったことです。

氷川 そうです。飛ばして「前回のあらすじ」をやりました。

庵野 オープニングはあるものだとずっと思い込んでいたので衝撃でした。最終回（26話）もなかったですけど。

氷川 26話はいきなりコスモクリーナーDを組み立ててま

オープニングがなかった

氷川 放送当時に話を戻すと、「ヤマト」は『冒険王』の連載がありましたけど完全オリジナルですよ。そこはどうですか。

庵野 『冒険王』は連載の話の展開がテレビに追いつかないので3回目あたりから後追いになりましたね。

氷川 そうそう。途中から完全にテレビのほうが追い越しちゃいました。だから、毎週毎週、まったく未知のものと物語が出てくる。

庵野 予告もなかったですからね。だから毎週、次は何があるんだろうと楽しみでした。

氷川 どれくらい続いていたんですか？

庵野 あの頃は4クルールの番組が多かったんで、まあ、1年かなと思ってました。半年で終わると思わなかったです。

氷川 じゃあ、急にテレビ欄に【終】って書いてあった感じですか。

庵野 「えつ、最終回？」ってなったのはあります。でも裏の「猿（の軍団）」も半年だったの。

氷川 （テレビ版の）「日本沈没」も同時終了ですね。

庵野 ええ、「日本沈没」も半年だったの、「あつ、一斉

した。

庵野 22話は最初にタイトルが出たからいいですけど。最終回はコスモクリーナー組み立ての最後の最後に起き上がりで出る。あのカッコよさは今でも痺れますね。オープニングなしでいいんだって。

氷川 いまの深夜アニメ、第1話にオープニングのない作品が多いですけど、その元祖でしょうか。

庵野 そうなんです。本編尺が長くなって調整するのにオープニングを削るというのがありますが、初回だとオープニングの映像が間に合わない、というケースもあるかと思えます。「ヤマト」だと最終回にいたってはエンディングもないんですよ。テロップと効果音だけでセリフも歌もない。あれは斬新でカッコよくて大人のストイックな演出という感じがものすごくよかったです。局には叱られた後から聞きましたけど。

氷川 そうですか（笑）。放送局としては「フォーマット通りにしろ」と。

庵野 そうですよ（笑）。

氷川 確かに当時だと、ああいうことしたとたんテレビ局に「けしからん！」とか電話かかってきちゃうんですが、いろいろ特別だったということですね。

「ヤマト」ロス

氷川 「ヤマト」が終わった後は、庵野さんはどんな行動をとったんですか。

庵野 「ヤマト」ロスが大きかったので「ヤマト」みたいなものを追いかけていた気がします。ずっと「ヤマト」の模写とかしてましたし、あとは松本先生の漫画を買い集めたりとか。高校生のときに友人と同人誌を作ったり、東京のファンクラブに入会したりとか。

氷川 そういうふうに広げていったんですね。

庵野 あとはよくわからないのにブルーバックス買って、相対性理論とかの勉強やりました。SF小説も手広く読むようになりましたね。それはそのときの友人らの影響もあるんですけど。

氷川 講談社ブルーバックスでSFの物理学的なウラを取るのあの時代の定番でした。

庵野 でも読んでいてもよくわからない箇所が多くて最後まででは読めないし、数式が出てきたとたんにもうダメでした。数式を飛ばしてると、やっぱり書いていることがさうにわからなくなるので。理系の高校にいたんですけどわからないのでブルーバックスは数冊買って終わっちゃいます。

再現できなくて。あと船全体の形も本編のイメージと違っていたので自分で作ろうと、中3のときにフルスクラッチで艦体まで作りましたが、主砲とか高射砲群とか艦橋構造物を作るにはとてもじゃないですけど至らなかつたですね。時間も気力も足りなくて。

氷川 船体を作ったのはすごい。

庵野 なんとか船体までは作ったんですよ。

氷川 バルサ板で？

庵野 いえ、プラ板でフレーム作ってそれにプラ板を無理矢理ねじ曲げて貼り付けて形にしました。実際の船と同じ構造で作ってました。

氷川 ヤマトのディテールの多さに痺れただけに、そこが逆にネックになるみたいだな。

庵野 ええ。自分には今も昔も無理でしたね。なので大人になって真鍋（正一）君に原型をお願いしたりしてます。やはり微妙な曲線も多くて立体化が難しいんですよ。

氷川 確かに。戦艦大和を改造するというわけにもいかなかった。

庵野 いかないですね。最初はそれも考えたんですけど。

氷川 考えたんですか、やっぱり（笑）。

庵野 改めて見ると全然違うんです。

した。あとは造船関係の本とか、軍事関係の本とかも買い始めていたんですが、そっちの方向に自分の興味が動いたのは「ヤマト」の影響かなと思いますね。

氷川 造船って専門書ですか？

庵野 ええ、船の造り方みたいな専門書でした。

氷川 キールがあつて強度設計はとか、そういうところから書いてあるような。

庵野 そうですね。大型船の構造や建造関係の本も買ったっていましたね。

氷川 模型は作らなかつたんですね。

庵野 模型は頑張ったんですけど、最後までは作れなかつたですね。完成までの根気と技術がなかつたので。それにやっぱり最初のプラモデルのヤマトが「これじゃないっ」というのが。

氷川 はいはい、第三艦橋の代わりにゼンマイボックスがついているので、ニッパで切り取りました（笑）。

庵野 僕はシュルシュルカタターみたいなやつを作って（電熱線で）ジューッて切りました。

氷川 ニクロム線ですか？

庵野 ええ、ニクロム線で切つて穴のあいた艦底部にプラ板を貼るというのはもちろんやっただんですけど、第三艦橋は紙粘土で作ったんですが、粘土だけだと細かいところが

あるけど、形が全然違います。

庵野 はい。とは言え軍艦好きが高まつてウォーターラインにはまつたのも「ヤマト」のおかげでした。あれで旧軍の艦船とか、『軍艦物語』みたいな本買って、プラモデルも重巡とか空母は素組みですが作ってました。それまでは大和、武蔵ぐらいしか興味がなかつたんですけど、空母、重巡、駆逐艦ぐらいまで興味が広がりました。

氷川 そういう興味が後々「エヴァ」でのネーミングに繋がる感じですか。

庵野 そうですね。好きだったの。あのときは日本軍の艦艇の名前は専門書を買って調べて考えてましたけど、今はネットで調べたら名称等がすぐ表示されるから随分と作業が楽になりましたね。

氷川 専門書って、図録みたいなやつですか。

庵野 ええ。「そうだ。冬月、あつたな」って感じですよ。全部の艦艇を覚えていたわけではないの。

自分でヤマトを動かしたい

庵野 それと「ヤマト」のおかげで高校生、浪人、大学生になつてもアニメを観続けるようになりました。それが一番大きいんですよ。「ヤマト」の前は周りのクラスメイト

も「そろそろテレビまんがも卒業かな」みたいに思っていて。中1のとき「キャシャーン」を観ている友人らもいたんですけど、中2になるとたんにテレビまんがを観ている人が激減したんですね。

氷川 14歳ですからね。

庵野 周りとテレビまんがの話をしてもだんだんと会話が合わなくなるし。「ヤマト」を観ていてその話ができるのは学年全体で3人だけでした。それでも観続けられたのはやっぱり「ヤマト」だからですね。今言う布教活動をしたくなる、それに値する作品でした。「ヤマト」のよかったところは先にも言いましたが同年代の男子中学生が観て恥ずかしくない、子供向けじゃないというのがあったと思うんです。作品にプライドがあったので、薦めるほうにもそのプライドを維持できるのは大きかったと思うんです。

氷川 確かに、それは自分にもありました。

庵野 リアルタイムで押井（守）さんも観ていた（「ウルトラ」セブン）もそれに値したと思うんです。子供もあまり出てこないし。子供が出てきても、真市君は上手な使い方をしていますよね。

——真市君、42話「ノンマルトの使者」ですね。

庵野 「ウルトラマン」より子供向けではなくって、ティーンが観ても「セブン」や「帰ってきたウルトラマン」

人には薦めなかったです。個人の趣味でしたね。あと、人に薦めていたのは「（未来少年）コナン」ですね。当時はNHKの番組というだけで観てくれる人がいました。

氷川 お墨付きになりますね。あと伺いたいのは、庵野さんがご自身で作られた「ヤマト」のアニメーションについてです。

庵野 高2のときに8ミリカメラで撮った5秒くらいのフィルムですね。

氷川 テレビ放映が終わってからだいぶ経っていますね。

庵野 経つてますね。高校2年になった頃から自分たちでセルアニメが扱えるようになりました。美術部の部長になったので、美術部の予算を自分で使えるようになったんですね。で、美術部の文化祭予算を生徒会に直訴して上げてもらって、それをセルアニメに全振りしました。セルとかセル絵の具とか、とても高校生の小遣いじゃ買い揃えられないですから美術部の部費で買って。美術部の部活動なので、彩色は部員が塗ってくれて、ありがたかったです。それでも8ミリフィルムと現像代とカメラ機材、編集機も自分の今まで貯めていた小遣いを全部使って買って揃えてました。文化祭用に作ってた「ナカムライダー」は、フィルム代や現像代は部費でまかなえたんですけど、それ以外は全部自腹でした。小遣いは全部そっちに使って、あれで自

は大丈夫なエピソードがいくつもあった。そういうところはやっぱり大きいですよ。とはいえあの当時にいい歳をして子供番組を観ていた押井さんもすごいですけど。「ガンダム」も知人らから「所詮は子供が乗るロボットだろ」と言われても、「いやいや、モビルスーツなんだよ」って言えますよね。中高生だけでなく、大学生でも友人に薦められるというのはよかったです。あと大学生で薦めて問題なのは「ズバット」でしたね。

氷川 「快傑ズバット」ですか。

庵野 「ズバット」は大学生が観ても恥ずかしくないですよ。

氷川 敵が改造人間とか怪人じゃなく、悪人と用心棒ですから。

——実際視聴者には大学生も多かったようです。

庵野 敵が広域暴力団というところで妙なリアリティがあつて。あと子供もあつたりと爆死したりしていましたから。——子供のいる小屋ごとプロパンガスで吹っ飛ばしたり、ボートに乗ってる子供をいきなり爆殺したり、あと射殺しようとしたりもしましたから。

庵野 今だとなかなか難しい描写です。今では難しい大きなセメント爆破も多くて画面も派手でいいですよ。ね。「タイムボカン」シリーズも好きで観ていたんですけどあまり

主制作みたいなのを覚えてたんです。「ヤマト」がなかったら自主制作でアニメ作ろうなんて発想もなかったと思うんです。自分でヤマトを描いて動かしたいという願望が全部自分の原点というか、モチベーションになっていますね。
氷川 実際自分で描いてみて、ヤマトはどうでしたか。動かしてみても。

庵野 いやあ、線が多いです。

氷川 しかも多い線を動画にすると全部、追って描く必要が。

庵野 描き送りだったんです。一発描きで。動画とかそういうのを何も勉強しなくて、独学だったんです。セルとにかくペンで黒線を引いて、それに裏から色を塗るという知識しかなかったの。どうも本とかを見るとトレース台というのがありますが、それはとても買えないし。

氷川 紙に描かずに、いきなりセルに線を描いたんですか。

庵野 紙に描くと光を当てないと透けないんですが、セルだけだったら何もしないでその上に重ねて描いていけばいい。下描きなしで直接セルに描いたらトレース台いらないじゃないというのが、自分としてはすごい発明だと思つて。で、セルに何か描いては、それに次のセルを重ねて描くという描き送りをやっていましたね。それで最初に描いたのがヤマトが飛んでいて途中から前に出るというアニメーシ

ヨンだったんです。前に出しながら手前に来て大きくなるというのは、だんだん描いているのが面倒になって、ああ、大きくしたら描く線が減っていく、あっ、手前に来れば案がでる、と（笑）。ほんととはあのまま回したりとかやりたかったんですけど。

氷川 線が減るのを発見して（笑）。とは言え、ものすごい手応えもあったんじゃないですか。

庵野 そうですね。8ミリカメラで撮影して、借りてきたスクリーンを美術室に置いて、自前の映写機でそれを上映したのを今でも覚えてますね。部員からも声が上がりました。

氷川 「おおっー」みたいなの？

庵野 ほとんど女子だったんで「キヤーー」ですけど。自分で描いたものが動く感動というのはそれが最初でした。

劇場版「ヤマト」

氷川 放送から3年ぐらい経っていたということは、そろそろ劇場版をやっていた頃ですか。

庵野 そうですね。劇場版は宇部市内ではやっていなくて、ちょっと離れた下関で1館だけやっていたのでそこに観に行きました。

かったですね。大画面で観られたというのはよかったんですけど、最初に黒味でオープニングが流れたのもすごく残念で。あれが大画面で観られると思ったのに、と最初に冷めた瞬間でした。

氷川 ノースパーのネガが見つからなかったんですかね（編注：昨年発見された）。

庵野 昔は音楽だけを冒頭に流す映画もあったので、それを踏襲していたのかもしれませんが。とにかく、劇場で観られるという期待が個人的にすごく大きかったです。40キロぐらい離れている下関まで始発電車で行って劇場の入口の前で友達と2人で待っていました。公開初日に劇場に並んだのも最初の体験でしたね。テレビの時の高揚感の再現を劇場版に求め過ぎていた自分にとって、劇場版はダイジェスト感が強くてもう一つ乗れませんでした。自分が作る方になって今は、あの話を2時間強でまとめる編集はすごいと感じます。切れるところをバツサリと切って話のコアなところだけを描くという。やはり劇場版の最大の功績は、世間がテレビまんがにとことん冷たかったあの時代に西崎さん個人が配給をし、それが大ヒットしたことにあると思います。あの劇場版の公開が、世間に対して「ヤマト」という作品と熱狂的なファンの存在とアニメが大きなビジネスになるという事象を示してくれました。劇場版の公開に

氷川 スクリーンで観てどうでした。

庵野 当時は再放送以外観る手段がなかったもので、でっかいスクリーンで「ヤマト」を観られたというのはうれしかったんですけど、個人的に音だけはテープが伸びるまで聴いていたので正直、音楽が違う、セリフが違う、この段取りが違う、とそれらがノイズとなって気になって集中して楽しめなかったんですよ。ほとんどそのままだった「七色星団」のところは大丈夫でしたけど。

氷川 セリフはだいぶ差し替えられていましたからね。

庵野 古代君の「愛し合う」のあたりも、なんか僕印象では違っていたんですよ。いや、この芝居はテレビと違う、と。自分がテレビの音を聴き過ぎていて頭に残りすぎていたが故の個人的なノイズが原因ともいえるのですが、違うと思った最初の感覚はどうにもできませんでした。流れは同じなのに音楽が微妙に違うというのも気になりました。これも個人的なノイズが原因といえそうですが。あと「ヤマト」の劇場版はいろいろと話をはしよりすぎてて。

氷川 そうなんですよ。事件の連続しかないんですよ。

庵野 ドラマのところとか。

氷川 全然ないんですよ（笑）。

庵野 テレビシリーズを食い入るように観ていたほうからすると、あの劇場版はちよつとしんどく、あまりはまれな

対する西崎さんの想いがなかったら「ヤマト」はマニアの間の伝説で終わっていたかもしれない。劇場版の公開が日本のアニメを変えた特異点ではないかと思っています。

「ヤマト」のない世界線

庵野 「ヤマト」をリアルタイムに観ていた世代からすれば、本当に「ヤマト」がなかったら今の日本のアニメーションはないと思うんです。「ヤマト」以降の人は「ヤマト」というものが存在しなくても、今のアニメーションがあるようなイメージがあったりすると思うんですけど、「ヤマト」から日本のアニメは始まったと言っても過言ではないので、それだけの作品であるということは、アニメの文化として歴史に残しておいてほしいと思います。

氷川 架空戦記みたいに「ヤマトのない世界線のアニメがどうなったか」みたいな小説を書いてみれば、どういふことかわかるかもしれませんね。

庵野 そうですね。

氷川 宮崎さんは今でも子供向けのアニメ作ってるとか、そういうことになるはずなんです。大人向けアニメは「お色気」になるとか。

庵野 「ハイジ」とか「タイムボカン」とか、そういう作

品群が残っていて、それで終わったかもしれません。もしくはもつと後になってから出てくるか。そのキーパーソンはやっぱり富野（由悠季）さんですよ。

氷川 富野監督は「勇者ライディーン」を引き受けた直後、「小さなバイキングビッケ」のチーフディレクターを依頼されているので、もしその前後が入れ代わっていただけでも大きく歴史は変わっているんです。

庵野 富野さんはアンチ「ヤマト」だったから、「ヤマト」がなければ「ガンダム」みたいなロボットものを作っていないと思います。

氷川 「ヤマト」は仮想敵だって言っていましたね。

庵野 ええ。打倒ヤマトと銘打った「ガンダム」に行かず、名作ものや玩具を重視した合体ロボットものをやっていたかもしれないですね。

氷川 押井さんはどうだったかとかね。

庵野 押井さんは……「タイムボカン」シリーズや「ニルス（のふしぎな旅）」は関わっていたかと思うんですけど、その後はわかりませんね。早々とアニメから足を洗っててもかもしれないです。

氷川 やっぱ「日本のアニメと言えば名作もの」ばかりになったかも。

庵野 「ヤマト」以降のアニメブームの流れが80年代にな

大きく変えましたね。

庵野 「ヤマト」のグッズはガムもカードも全部買ってましたから。

氷川 放送当時の？

庵野 はい、放送当時からです。あれぐらいしか地方だと資料がなかったですからね。とくにカードはよかったです。

氷川 （天田印刷の駄菓子屋商品）ミニカードですね。あれは当時としては貴重な場面写真でした。

庵野 当時はまだカメラでテレビ画面を撮るところまで至ってなかったんです。放映中の下校時に本屋で見つけて大喜びで買った『宇宙戦艦ヤマト大図鑑』も、資料性が高かったのでページがバラけるまで何度も見ました。それと同人誌、ファンダムが大きく全国レベルのネットワークで広がって伸びたのも「ヤマト」からですね。それまでファン活動として（サイボーグ）009、「海のトリトン」や特撮等があったと思うんですけど、あんなにファンジンが林立して、アニメファンというものが全国的に広がって結託したのも、やっぱり「ヤマト」からですし、あとファンを組織的に利用して宣伝に持っていくというのも「ヤマト」からですよ。

氷川 西崎さんはそういうところに商売のセンスがありましたね。

かつたら、漫画原作由縁の「うる星（やつら）」や「タッチ」等がテレビアニメ化されたかどうかともわかりませんしね。

氷川 「スター・ウォーズ」をどう考えるか。

庵野 「スター・ウォーズ」も「ヤマト」……

氷川 スタッフは作る前に、絶対観てますよ（笑）。

庵野 「ヤマト」がなかったら「スター・ウォーズ」もあなっているかどうかかわからない。そして「エヴァンゲリオン」は絶対ないですね。僕がアニメをやっていないですから。

氷川 「ヤマト」の劇場版は、言い方は良くないですが「おカネの臭いに敏感な大人がいっぱい集まった」つまり「ビジネスになる」と示したのが後々大きかったと思います。

庵野 そうですね。ストリートに「アニメがおカネになる」というのを大々的に世間に示したのも最初は「ヤマト」だったと思うんです。当時は新聞や週刊誌までがそれを取り上げて騒いでもしたから。今も昔も世間の関心は経済効果というか数字です。「ガンダム」もそうですが、テレビ放映が終わった後でもおカネになるというのをガンプラで世間に示していないとアニメーションは今のような普及はしなかったと思います。

氷川 あと「ヤマト」の劇場版では、劇場に行くとポストカードとかグッズがいっぱいあるというのも「ヤマト」が

庵野 全国の「ヤマト」ファンクラブに号令かけて動員とか、すごかったですよね。同人誌買うと画面写真が付いてきたんです。モノクロの走査線の入っているよくわからないものなんですけど、それでも、「ああ、ヤマトが写っている」というだけでありがたかったです。ファン活動を大きくしたのも「ヤマト」の功績ですよ。

氷川 番組が終わって、もう満足したということではなく、消えないようにしました。

庵野 番組が終わっても作品を継続して好きでい続けられるような場を提供したのも「ヤマト」が最初です。僕もファンクラブに初めて入りました。『季刊ファントージュ』（75年創刊のアニメーション専門誌）も買い始めました。まだ『アニメージュ』がないときの唯一のアニメ専門誌は『ファントージュ』だったんです。

氷川 「ヤマト」の写真も載っていました。

庵野 あと『アニメーション』（すばる書房、月刊絵本別冊）も買っていました。あれに載っていた宮崎さんの走り方の解説とか、あつ、こう描くんだったってすごく勉強になりました。それまでアニメの本って『小型映画——アニメと特撮』（玄光社、8ミリフィルムのアマチュア向け教本）とかあのへんしかなかったのに、いきなり実践的なことが書いてあったので、すごく勉強にはなりましたけど、でも自分ではそ

氷川 50年前の体験談をだいぶ聞きましたけど、「ヤマト」放送50周年記念イベントに関する話も伺いたいと思います。「宇宙戦艦ヤマト 全記録展」が7月19日から大阪で開催されます。

庵野 3月に東京・渋谷で開催した展示が、大阪・なんばに行きますので、よろしくお願いします。グッズもたくさん増えます。

氷川 展示についても少し聞かせていただければ。

庵野 アニメや特撮作品の中間生成物（中間制作物）って、やっぱり力があるんです。だからATAC（アニメ特撮アーカイブ機構）でそれらを遺そうと画策しています。とくに「ヤマト」は設定1枚とっても、こんなに描いていたんだ、こういう細かいところまで考えていたんだとわかります。原画も線の良さとかも含めて本物が遺っていると、画面の奥にある、それまでの制作過程とか、そこに込められている、作っている人たちの想いみたいなものまで感じられて、なおかつ自分もこういうことをやってみようというキッカケになると思うんです。設定とか原画とか、そうい

んなに「走り」とか描いてないんで（笑）。

50周年イベント、そして新作

う制作の途中にあるものは、ジブリもレイアウト展などをやっていますし、ディズニーもイメージボード展など作品がつくられていく過程のものを展示しています。いろいろな人に見てもらおうというのはすごく意義があることですし、文化的にも必要なことだと思います。（「ガンダム」の）安彦（良和）さんの原画も遺っていてよかったです。原画集も出版できたし、展覧会も巡回しています。セルだと動画のトレースした線で、あの安彦さん自身が描いた線の良さが出てこないの、やっぱりオリジナルのレイアウトや原画が大事なんじゃないですか。「ヤマト」もコピーでは味わえない鉛筆線の美しさですね。今回、高解像度スキャンによる出力がメインですけど、ちゃんと実物も額に入れて飾ってあるので、ぜひ観てほしいと思います。これだけのものが50年前にできているというのも含めて、感動にはなると思います。アニメのものなので立体物は少ないですが、充実した展示にはなっているかなと。こういう「展覧会」を他作品でも続けていければと思います。

氷川 今回、ボタンで再生できる効果音もありますよね。

庵野 そうですね。

氷川 効果音マン柏原満さんの大事な遺産です。

庵野 「ヤマト」を語る上で重要な効果音も含め「ヤマト」全体の歴史も可能な限り展示しているので、この50年、ど



- 1 会場エントランス
- 2 ヤマトの内部図解模型
- 3 幻の企画書に掲載された数々のアート
- 4 当時のプラモデルなどの玩具やグッズ類
- 5 大年表空間



庵野秀明 企画・プロデュース 放送50周年記念 「宇宙戦艦ヤマト 全記録展」

2025年7月19日～8月3日まで大阪・なんばスカイオ 7階 コンベンションホールにて開催。当時の企画書をはじめ、キャラクターやメカニックの設定画、原画、背景画など厳選された貴重な資料2,000点以上が集結。ヤマトシリーズ50年の歴史を振り返る大年表空間や楽曲紹介、巨大ヤマト艦の模型に、当時の商品など充実の展示。

主催：東北新社、著作総監修：西崎彰司、企画：カラー／アニメ特撮アーカイブ機構（ATAC）／乃村工藝社、制作：乃村工藝社／東北新社、協賛：バンダイナムコフィルムワークス、協力：読売テレビ

展示写真は東京会場のものです。大阪会場では展示方法が異なる場合があります。©東北新社/著作総監修 西崎彰司



続編としての『さらば』と分岐する『ヤマト2』で『ヤマト』というシリーズ作品のパラレルワールド化は決定的になりました。松本先生

と
(前略)
——新作については、カラーの公式サイトで発表された庵野さんのコメント(『宇宙戦艦ヤマト』という作品との関わりについて(庵野秀明より))2024年10月13日)を一部引用すると
庵野 ままですね。制作作業は、多岐にわたりますと進めています。

氷川 現時点では去年発表したままの状況ですか。
庵野

——新作については、カラーの公式サイトで発表された庵野さんのコメント(『宇宙戦艦ヤマト』という作品との関わりについて(庵野秀明より))2024年10月13日)を一部引用すると
庵野 ままですね。制作作業は、多岐にわたりますと進めています。

氷川 いやあ、今はまだ(笑)。いろいろと頑張ってます、ただ。
庵野

氷川 いつぐらいに発表とか、そういうのも全然まだわからない？
庵野

——2008年にバンダイビジュアルが発売した「宇宙戦艦ヤマトTV DVD BOX」の特典だった、西崎(義展)さんと庵野さん監修で真鍋さんが原型を担当した「1/700『宇宙戦艦ヤマト』プラモデル」の復刻商品化です

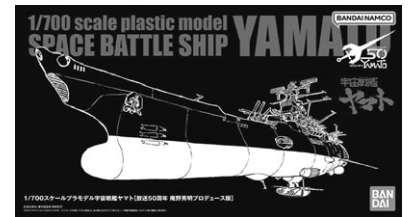
氷川 あと庵野さんが監修されたプラモデルのこともお願いします。
庵野

ういうことがあったかも含めて俯瞰で振り返ることができ、わかりやすく伝わりやすい展示にはなっていると思います。ぜひ観に来ていただきたいです。

氷川 あと庵野さんが監修されたプラモデルのこともお願いします。
庵野



1/700 スケールプラモデル 宇宙戦艦ヤマト
[放映50周年 庵野秀明プロデュース版]
プラモデル組み立て時サイズ: 約 全長380mm×高さ120mm、
付属台座: 約 全長115mm×高さ60mm。TVアニメのセル画をもとに庵野秀明が再監修した新たな成形色を使用。



庵野秀明による描き下ろしイラストを使用した外装パッケージ。発売・販売元: バンダイナムコフィルムワークス。※予約期間内であっても、予定数に達した場合、販売終了の場合があります。予約期間終了後も在庫分がある場合は販売を行うことがあります。※商品写真・仕様は、開発中のもので商品仕様等は予告なく変更になる場合があります。©東北新社/著作総監修 西崎彰司



インタビューの氷川竜介氏(右)と。

氷川竜介 | ひかわ・りゅうすけ

1958年兵庫県生まれ。アニメ・特撮研究家。明治大学大学院特任教授、ZEN大学教授、特定非営利活動法人アニメ特撮アーカイブ機構(ATAC)副理事長。大学在学時からアニメ誌上で執筆を始め、企業勤務を経て2001年に文筆家として独立。毎日映画コンクール審査委員、東京国際映画祭プログラミング・アドバイザーなどを歴任。主な編著書に『20年目のザンボット3』(太田出版)、『安彦良和アニメーション原画集「機動戦士ガンダム」』、『日本アニメの革新——歴史の転換点となった変化の構造分析』、『空想映像文化論 怪獣ブームから「宇宙戦艦ヤマトへ」』(KADOKAWA)など。

が描いていた「ヤマト」の世界もパラレルで有り、西崎義展さんの復活篇も本編が2つ存在します。(中略)

氷川 最後に準備中の新作で何かお話しできることがあれば。
庵野

氷川 そこも含め、ある意味、皆さんの理想が詰まっている感じの立体ですね。
庵野

氷川 そうですね。ニュースタンド、それまでのヤマトのプラモデルとは違う新しい艦体形状のヤマトの姿を提示できたかなと思っています。

氷川 最後に準備中の新作で何かお話しできることがあれば。
庵野

氷川 そこも含め、ある意味、皆さんの理想が詰まっている感じの立体ですね。
庵野

氷川 そうですね。ニュースタンド、それまでのヤマトのプラモデルとは違う新しい艦体形状のヤマトの姿を提示できたかなと思っています。

氷川 最後に準備中の新作で何かお話しできることがあれば。
庵野

氷川 そこも含め、ある意味、皆さんの理想が詰まっている感じの立体ですね。
庵野

歴史だけでなくコンテンツとして強度の高い作品にリセットやパラレルは当然の事象と思います。

自分にとって同じ作品が重なったまま複数存在するのは、子供の頃から当り前のことでした。

先人の作られた「ヤマト」の歴史を自分達もまた踏襲していると同時に複数の「ヤマト」が存在するパラレル感には「ヤマト」らしい流れの継承であると思っています。

（中略）

この度自分は、関係各社のご厚意により新作の『ヤマト』を作ることに関して比較的自由な権利を得ました。だからこそ、中2の自分の夢を叶えるという小さな目標ではなく、新作の『ヤマト』は次の100周年に継続する可能性の高い作品群にするべく心掛けています。

（後略）

と、いうことです。

庵野 いま「ヤマト」を自分がやる段になって、その呪縛というか重さをすごくヒシヒシとリアルに感じています。ものすごい重圧の中での作業ですが、面白い作品にするべく、今も肅々と頑張っていますので、よろしく願います。

（このインタビューは2025年5月20日に行われました）

◇構成／編集部